

日  
週刊文春  
1977年6月23日

# 大物大使が出揃った!

# 米中ソの 東京外交戦争



なかじま みねお  
**中嶋嶺雄** は新大使に符浩氏を任命、ソ連のポリャンスキー  
東京外国語大学教授 大使との間で三ツ巴の東京大戦争が始った!

当時、ワシントンでは駐日米大

待望のマンフィールド駐日米大使着任と前後して中国  
使が着任した。鳩山外相は、「あ  
なたのような経験豊かな政治家  
が、大使として着任されたこと  
は、米国の対日重視の現れだと  
考えます」と、歓迎の挨拶をお  
こない(6月8日)、次いでマ  
大使が早々と福田総理を表敬訪  
問した。  
このようなことは、わが国の  
外交慣例にも稀有なことであっ  
て、マ大使が「超大物大使」だ  
からだという。  
こうして日米両国首脳も、マ  
スコミも、あげて「超大物大使」  
の着任をはやしている時に、最  
友好国の大使に対し、外交辞令、  
抜きで、こう申し上げては不謙  
慎であろうが、私は、「果して  
マ大使で大丈夫だろうか? ア  
ジアのことがわかっていないカ  
ーター大統領のミス・キャスト  
でなければいいが……」と懸念  
している。  
去る2月下旬のことだった。  
カーター政権の中国及び東アジ  
ア政策がどのようなものになる  
のかを知るために、春休みを利用  
して訪米していた私は、ワシ  
ントンでの日程を了えてニュー  
ヨークへ飛び、その足で、コロ  
ンビア大学の東アジア研究所を  
訪れた。旧知のジェームズ・モ  
ーレー教授に会うためである。

マ大使へのわれわれの不安も、

使の下馬評に五、六名の名前が  
あがっており、マンフィールド  
氏は当然有力候補ではあった  
が、その中には、アジアをよく  
知る知日派のモーレー教授の名  
前もあった。  
そのことを話題にすると、教  
授は謙虚に、「噂ですよ」とイ  
ナして、私に日中友好条約の締  
結如何について、鋭い質問をあ  
びせかけてきた。同じカーター  
大統領周辺の知日派とはいって  
も、モーレー教授とマンスフイ  
ールド氏では、大きく違う。私  
の目にマンスフイールド氏は、  
いわば時流に乗った。クレイゴ  
とを老いの一徹のように主張  
してきた、米議会の長老としか

## 世界的政治都市トウキョウ

アメリカのアジアからの撤退  
という今日の大状況の中で、ベ  
トナム和平や、米中接近に精を  
出したマンスフイールド氏の任  
命は、たしかに今日のアメリカ  
にとつては、国益に合致する人  
選なのかもしれない。だが、そ  
のことがアジアの安定、ひいて  
は、日本の安全にとつてはもし  
かすると極めて大きな危険を招  
米しかねないという不安が生ず  
るところに、今日の日米関係の  
鋭い矛盾が存在するのである。  
この点にある。  
アメリカのアジア政策に日本  
が、心地よく乗っていられるの  
なら話は別であるが、他方で朝  
鮮半島や台湾海峡を含む東アジ  
アの一面において、アメリカと  
は違つて、九十度の角度で、も  
ろに中ソ双方に関つていかざる  
を得ない日本としては、今や、  
こと東アジア状況や中ソ関係  
に関しては、日米同一歩調とば  
かりは言つていられなくなりつ  
つある。マンスフイールド大使  
を外交辞令で歓迎ばかりはして



右より、ポリヤンスキー（ソ連）、符浩（中国）、マンズフィールド（アメリカ）三大使

いられないゆえんである。

さて、周知のように、今や東京はニューヨークに次ぐ、国際政治都市だと言っても過言でなく、それだけ日本が世界に大きな役割を負っているとも言えようが、アメリカが「超大物級」なら、迎えるソ連の側も、すでに一足先に「大物大使」ポリヤンスキー氏を東京に送り込んでいる。ポリヤンスキー氏がソ連共産党政治局員、第一副首相といった輝かしい経歴の持主であったことは、彼の實力の程を窺わせるが、マ大使が花道興行的な着任であるのに対し、ボ大使はブレジネフ体制からハジキ出された結果の着任であった。それだけに、「失意の大使」かと思われたが、一年間の東京での実績は毛沢東の死、北京政変などでガタついた中国大使館を横目に見て、さすがに着実だとの評価もあり、ブレジネフ・土光会談に象徴される「日ソ経済協力」でも点数を稼いだ。

しかし、ボ大使にとって、この一年間の日ソ関係は針のムシロでもあったわけで、それは、昨年9月のミグ25戦闘機事件、今春末の日ソ漁業交渉において周知のところである。とくにミグ事件で硬化したブレジネフ書記長が、昨年10月の党中央総会で、「日ソ関係のためには、ま

だ、複雑な闘いが必要だ」とのべて以来、ポリヤンスキー大使は悪戦苦闘を強いられたわけだ、ブレジネフ書記長の「ポリヤンスキーいびり」ではないかとささやかれたほどである。だが、ミグ事件に際し、クレムリン内部には、「捕えられたミグをロケットで爆破するには、三十分あれば十分だ」という恐るべき論議さえあったと言われているだけに、もつれにもつれた一連の日ソ関係が一段落した今日、ボ大使の手腕はやはり、あなどり難いと見るべきであろう。この点でも「マンズフィールド大使で大丈夫だろうか？」

## 周恩来の下で育った符浩

折しも、中国側は、北京政変後の空白を埋めて、符浩氏を新駐日大使に任命した。懸案の日中友好条約は、それが、「覇権条項」という中国の対ソ戦略上の「刃物」を含むものであるだけに、わが国としては、日ソ交渉でソ連にいじめられたからといって、対ソ強硬外交から、対中軟弱外交へと乗り換えればすむというほどのものではない。

この点では一見、自民党タカ派の横やりに見せかけて軽々な選択を行なわなかった福田外交

と思わざるを得ないのである。ポリヤンスキー大使はクレムリンの中のポドゴルヌイ派だというのが、クレムノロジスト（ワレムリン通）の見方である。だとすれば、ソ連新憲法草案の公表とともに、去る5月下旬のソ連共産党中央総会で、ポドゴルヌイ最高会議幹部会議長が、突然、解任され、ポルトビュロー（中央政治局）にもはや、頼るべき上司がなくなったボ大使としては、「配所の月」をおおぐ心境をこの際ふっ切って、かえって東京を舞台の外交戦に全力投球することになるのではなからうか。

符浩大使はマ大使やボ大使と違って、中国外務省に一貫して、身を置いてきた職業外交官であり、またポリヤンスキー大使同様、日本については、ズブの素人である。74年以来、インドシナ戦争勝利後のベトナム大使であった経歴が、ハノイを舞台とする中ソの角逐を繰て来た試練の人物であることを示している。

ただ共産圏諸国に共通していることだが、特に中国の場合、外交幹部の政治的地位は余りにも低い。

このことは解放後一貫して周恩来外交の實務上の担い手であった喬冠華前外相の運命にも反映されている。喬冠華ほどの人物であっても、所詮は、党中央ではようやく、ヒラの中央委員であった。彼は、余りにも周恩来色が強かったが故に、官僚のサガなのか、周恩来が、「批林批孔」運動で勢いに乗っていた江青らに痛めつけられていた時、節を曲げて、江青に近づいたのである。

1975年5月の天津における喬冠華演説は喬の変身を印象づけたものであった。ところが喬冠華のヨミはずれて、こともあるうに江青ら「四人組」が一網打尽にされて、喬外相も一挙に失脚して大衆裁判にかけられる身となった。

符浩氏も周恩来、喬冠華の下で育つて来ただけに、鄧小平の影におびえる華国鋒体制において、その身の処し方には慎重にならざるを得ないだろう。

こうした米・中・ソの角逐の中で、わが国の外交的・主体性は、如何にして可能か。今日ほど、外交に知恵が必要な時代はないと私は思う。